

## 伊藤正一教授の思い出

片岡義雄

昭和44年9月15日、本学経済学部および大学院教授、伊藤正一氏が心臓疾患のために世田谷区砧町の自宅において急逝せられ、17日同所において、神式による葬儀および告別式が、静かに秋雨の降りしきるなかに、しめやかに執りおこなわれた。享年74歳、心から深い哀悼の意を表する。

伊藤教授は、明治28年5月20日、高知県高知市に呱呱の声をあげられ、長じて大正2年3月、市立高知商業学校を卒業し、同年9月青雲の志押えがたく、上京して、東京高等商業学校（現在の一橋大学）に入学せられた。大正6年3月、同校を卒業すると同時に、三菱合資会社に入社せられ、翌7年3月まで主として神戸および香港等の支店に勤務せられた。

次いで、大正7年4月、前記の東京高等商業学校専攻部に入学し、9年3月卒業と同時に三井物産株式会社に入社せられ、10年8月まで、もっぱら蘭領東印度および布哇等の支店に勤務せられたのである。

さらに研学の念に燃え、実業界におさらばを告げ、大正10年9月から15年3月にいたるまでの4ヶ年半の間、郷里の母校である市立高知商業学校、東京都の私立中央商業学校および青山学院等の教諭として簿記会計学を講じながら、孜孜として斯学の研鑽に努力せられたのである。

つづいて、大正15年4月、高岡高等商業学校（現在の富山大学経済学部）教授に就任し、会計学講座を担当せられた。なお昭和2年4月から4年3月にいたる2カ年の間、文部省在外研究員として、ドイツおよびフランスの両国に留学せられ、会計学の智識に一層の磨きをかけられたのである。

しかるに、健康等の関係から、昭和6年3月同校を退職せられ、同年4月から横浜専門学校（現在の神奈川大学）の教授となり、13年3月までの8年間、

会計学講座を担当せられたのである。

昭和13年4月、懇請せられて日本通運株式会社に入社し、その会計組織の確立に努力せられたが、一応目的が達せられたので、16年3月退職すると同時に、同年4月から25年3月にいたるまでの9年間、中央大学講師として、商学部および経済学部において会計学を講じられた。この間、昭和17年華北交通の招聘によって北京に在勤せられた。

昭和25年4月、成城大学教授に就任し、39年3月に定年退職するまでの14ヶ年の長い間会計学講座を担当せられた。その間、経済学部長、学長事務取扱および学長臨時代理等の要職を兼任せられて、敏腕を振われたのである。

昭和39年4月、千葉商科大学に会計学の教授として赴任せられたが、在職僅かに2年、三顧の礼黙しがたく、昭和41年4月駒沢大学教授となり、経済学部および大学院商学研究科(修士および博士課程)において会計学を講じられて、今日にいたったのである。

以上略記したところによって明らかなように、伊藤教授の長い生涯は、2、3の例外を除いて、もっぱら会計学の教授と研究とに注がれたのである。そしてその間、専門雑誌等に数多の指導的にしてかつユニークな論文を執筆せられたばかりでなく、次のように、優れた単行本を上梓せられたのである。まことに驚異に価いすることである。

1. 原価会計論（巖松堂書店発行）
2. 運送業会計（東洋出版社発行）
3. 貸借対照表の特殊研究（税務経理協会発行）
4. 簿記会計の一般的基礎（同前）
5. 新訂・大学入門簿記（同前）

ここに特筆すべきは、教授がつとに、わが国において未だ何人も研究のメスを入れなかったドイツマルク貸借対照表の研究に大きな関心と興味とをもたれたことである。昭和36年7月成城大学経済学会から出版せられた「ドイツマルク貸借対照表の研究」は、じつに教授の多年の研究の成果を集大成したものであって、おそらく、この方面の研究における金字塔と称することができるであ

ろう。

私が伊藤教授を識ったのは、今から約45年前の大正14年4月1日の午後、さきに一言した当時の中央商業学校（京橋区越前堀所在，長井真琴博士等の設立せられた学校で，現在の中央学院大学の母体）の教員室であった。たまたま晩学で学窓を出た私が同校の簿記の講師（現在の非常勤講師に当たる。）に採用せられ，入学式の終了後宝閣善教校長を通じて諸先生に紹介せられた際に，すでに同校の簿記の専任教諭になっておられた伊藤教授に始めてお目にかかったのである。長身白哲，私と異なって，胸ポケットに真っ白なハンケチをのぞかせた，見るからに端正たる青年紳士であった。

爾来，おたがいに勤務先は変わっても，私は同教授によって啓発せられ，激励せられることがきわめて多かった。教授は，みづからの身を持つこといって厳格であって，むしろ古武士の面影すらあった。しかし，他に対しては，その風貌のしめすように，穏やかで，まことに春風駘蕩たる感があった。

ことに教授が駒沢大学に見えられてからは，久しぶりに同僚として，旧交を暖めながら，ささやかな研究室においてともに学問を論じ，隣接のオリンピック公園の芝生の上でともに人生を語り，ことに「わが駒沢大学の大学院にも，ドイツ会計学専攻の博士課程が設置されると嬉しいがなあ。」などと，たあいのない望蜀の雑談を交え，楽しい日々を過したのである。

しかるに，本年の6月ころ，ことに駒沢大学の校舎の一部が封鎖せられたころから，教授が階段を昇降する際に息切れを訴え，途中で一休みする姿がしばしば見受けられるようになった。研究室を第7号館の5階から第2研究館の1階に移された際には大いによろこばれたが，今にして思えば，すでに相当に心臓が弱っていたものと，想像せられるのである。

それでも，去る9月3日の機動隊の導入による封鎖解除後の専任教職員会が旧大講堂で開催せられた際には，最前列に坐られ，いたって元気のようにすら見受けられたので，一安心した。私は何の気なしに，「伊藤さん，授業が再開せられたら，としよりの冷水などと考えないで，又一緒に精を出して大いに勉強しましょう。そして，少なくとももう5，6年位いは達者で，駒沢大学のた

めおたがいに働きましよう。」といったら、「5,6年,うーむ,5,6年ねえ。」と答えた切り,そのまま深刻な顔つきをして,うつむいてしまわれた。ちょうど隣りにお坐りになっておられた笠森伝繁先生も,びつくりせられたようである。

しかしこれが,私が伊藤教授にお目にかかり,そして談話をした最後である。その後2週間足らずで,教授はついに幽明ところを異にせられてしまったのである。純粹で通された長い生涯に終止符を打たれてしまったのである。

伊藤教授は,いつも口ぐせのように,「私はひとり我が道を行く。」と,いわれた。このことは教授の研究面においてもそうであった。他人のやらないこと,いわゆる学界の未拓境を開拓すること自身が,おそらく教授の唯一の生きがいであったに,相違ない。さきに一言したドイツマルク貸借対照表の研究のごときは,じつにその一つの証左である。

要するに,伊藤教授は文字どおり「孤高の碩学」であった。右顧左弁せず,ただひと筋にわが道をいくところの真摯な学者であった。このようにすぐれた学者がこのうつし世から永劫に去られたことは,単に駒沢大学にとって手痛い打戟であるばかりでなく,わが国の会計学界にとっても,到底償うことのできない大きな大きな損失である。

願わくば,伊藤正一教授の在天の霊のとしなえに安らかであらんことを。